

東日本大震災・復興支援

宮城県南三陸町へ職員派遣

市は、10月1日から東日本大震災の被災地である宮城県南三陸町へ職員を派遣し、復興支援にあたっています。10月は松瀬浩建設課長を、11月から松本啓輔職員（都市計画課）を派遣し、今後は中堅・若手の職員が交代で2〜3年間支援をしていく予定です。

今回支援にあたった松瀬課長がその報告をします。



建設課
松瀬浩課長
(10月1日～31日まで派遣)

宮城県本吉郡南三陸町に着任し挨拶を済ませた後、隣町のアパートを紹介していただいた。どうしてこんなに遠いところのアパートなのか少し疑問だった。翌日町内を廻って目にする光景は、津波で流された家屋の基礎ばかりである。集落が、町がすべて流されている。町民の方たちは集落単位での仮設住宅で生活をされている状況であり、復興にはまだまだ時間がかかる。今は最低限の生活ができる復旧を望まれている。このような状況のため、隣町のアパートからの通勤となってしまうのである。

私が配属された部署は「建設課施設整備係」。この町の基幹産業である漁業の基である漁港を整備する部署であり、漁民の方たちの期待も高い。しかし整備の基準となる地面の高さが地震で動き、困難を極めている。地震による大陸棚の沈下で、場所によっては80cmから1mも下がっている。満潮時には漁港施設や道路が浸水してしまう状況のため、1日も早い復旧を望む声を聞く。

町としては最優先に復旧事業を推進しているが、限られた人員では限界がある。町職員10人に加え、全国から集まった派遣職員や任期付職員を含め総勢29人態勢で対応に追われている状況である。しかし、私が最初にかけて言葉は「焦ることはナカンベ、ゆっくりでエエカラ」とのねぎらいであった。

町の職員はみんな何とかしようとして一生懸命である。震災から1年7か月経ち、町の人たちは心の落ち着きを取り戻し始めている。今からが本当の復旧・復興の始まりだと思う。

今後、多久市として人的支援を行う予定であるが、「何かをやるのではなく、町の人たちと一緒に頑張る」ことを第一とする気持ちで支援にあたってほしい。やる気を持って何事にも挑めば、相手にも心は伝わる。

▶南三陸町防災センター



▶津波により建物と道路が流されてしまった、歌津地区



市長コラム

温故創新

Message for citizen

被災地復興に人的支援を開始

市長 横尾俊彦

東日本大震災の被災地復興には人的支援が欠かせません。そこで多久市も10月から宮城県南三陸町への人的支援を始めました。

被災地は苦難の中にあることを8月末の現地訪問で痛感しました。夏草で緑の集落や住宅地をよく見みると、住宅基礎だけ。津波がまるごと建物を持ち去った跡です。道路は通れますが、橋は仮設。河口堰も全壊。堰の管理棟は大破して転がっています。広い空間となった市街地にわずかに残された建物には破壊の爪跡が刻まれています。防災庁舎は津波の衝撃を物語っています。そこかしこにわずかに残った道具類が、そこに人々の日々のドラマがあつたと物語ってくるようでした。

土地は6m程沈下し、住宅地にはできません。全世界高台移転です。それには山を削り土地確保が不可欠。突貫工事の前には土地所有の移転手続き。相続書類が揃わないと円滑には進みません。

主産業は水産業で、港湾復旧も要です。できなければ生業もままならず、生活と希望をつなげなくなり。コンビニも商店もプレハブ仕立て。技術的にも事務的にも仕事山積なのです。

復興はまだ緒にいたばかりの感です。「人材なくして復興進まず」という切実な実情を鑑みて、10月から南三陸町への人的支援を始めました。

「被災地を忘れないで」。そんな現地の願いに添えるためにも、被災地の人々のことを心にとめ、引続きの支援へ、理解と応援をお願いします。